

例会日/毎週水曜日 例会場/センチュリーロイヤルホテル TEL011(221)2121

事務所/札幌市中央区北5条西6丁目第一道通ビル1F
TEL011(242)3360 FAX011(219)1308 IPTEL050-7520-3757
E-mail sapporo-morning-rc@purple.plala.or.jp

本日のプログラム

「米山月間に因んで」 太田勝久米山奨学委員長
金 甫珉さん

会員誕生日 若松 孝さん(10月9日)
 結婚記念日 嶋野貞隆さん・恭夫人(10月3日)
 田上建夫さん・雅子夫人(10月5日)
 広瀬 進さん・春代夫人(10月5日)
 笹山峻弘さん・恵利夫人(10月8日)
 坂本勝彦さん・慶子夫人(10月9日)
 ロータリーソング「我等の生業」
 10月の音楽 「シャンソン(枯葉ほか)」

《世界のアツモリソウ》

内田一也氏

私が「アツモリソウ(ホテイアツモリ)」と最初に出会ったのは、1975年、札幌近郊の定山溪天狗岳だった。少なくとも3種類のアツモリソウが咲くと云うキリギシ山で「キバナアツモリソウ」に会うことが出来たのは、81年のことだった。斜面一面に咲いていたが、85年頃から盗掘が激しくなり、88年には殆ど全滅状態になってしまった。自生地回復のために入山禁止措置が取られて来たが、どの程度まで回復したか確認したいものだ。

「レブンアツモリソウ」を初めて見たのは90年だった。当時、既に盗掘が問題になっていたが、その後、盗掘防止のため保護区以外の花は開花直後に摘み取られるようになったのは、何ともやりきれないものだった。92年には、大沢川河口近くの野菜畑近くに、鮮やかな赤色のアツモリソウが咲いているのに気づいた。98年まで繰り返し観察して来たが、レブンアツモリソウの赤花品種ではないかとの説に傾いている。90年には、保護区の観察路脇に「カラフトアツモリソウ」が花を開き始め、年々その数を増やして来たが、植物写真家梅沢氏が道東で撮影したカラフトアツモリソウとは明らかに違い、異質に感じていた。その後、スイスやロシアでも礼文島と全く同じタイプのカラフトアツモリソウを見るにつけ、世界の植物園間の種子交換で得た種子を礼文島に播種したという証言もあり、礼文島のカラフトアツモリは自生したものではなく、外来種と位置付けるべきではないかと考えている。アツモリソウは交配種(雑種)を作りやすく、片方は常にカラフトアツモリソウであるとされ、礼文島でも保護区の中で「交

配種」が出現しているのに気づいたのは91年で、当時1株だったものが98年には4株に増えていた。在来種間での交配は忌むものではないが、持ち込まれた品種との交配は植物界の分布を壊すことになり、絶対あってはならない。

今年6月、ロシア・ウラジオストックでは、様々な色の「アツモリソウ」の他に、「カラフトアツモリソウ」との「交配種」や「エゾノクマガイソウ(キバナアツモリソウの母種)」が一面に咲いていた。また、3年前から中国・四川省、雲南省の花を見に出かけているが、「アツモリソウ」も殆ど一色で、濃淡や花の大きさで分類されているようだ。日本では想像も出来ないような形をしたアツモリソウの他に、唇弁が黄色のタイプもあったが、レブンアツモリソウとは違うものだった。北海道のアツモリソウとしては他に、「クマガイソウ」が日高地方から渡島半島にかけて分布しており、「コアツモリソウ」も檜山町などの西南部の暗い樹林下に生育するが、「コアツモリソウ」にはまだお目にかかっていない。

「レブンアツモリソウ」は世界に類を見ない気品を備えたアツモリソウであり、北海道の、否、世界に誇れる財産として絶滅から守らなければならないと感じている。

レブンアツモリソウ
キバナアツモリソウ
ホテイアツモリソウ

赤花レブンアツモリソウ

会場は禁煙です。1時間だけ、ご協力お願い申し上げます